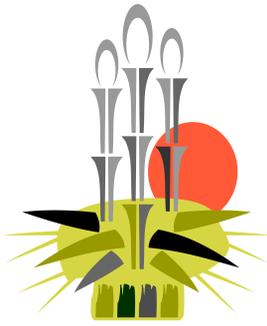


【校長室便り】

No.41

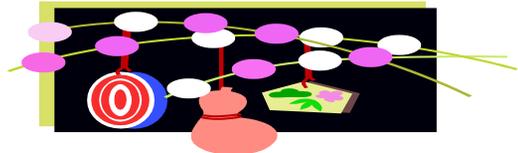
H30年1月10日(木) 土佐町小中学校 谷内宣夫



日本に伝わる 十二支の語

皆さんは、十二支の由来を知っていますか? 「どうして十二支はあの動物なの?」と疑問に思ったことはありませんか? 日本では「十二種類の動物に当てはめた」お話がポピュラーです。

右の段に紹介します。



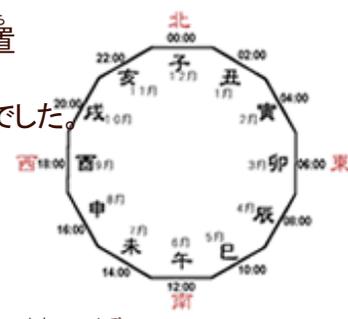
十二支の始まり

十二支は、中国の王充(おういつ)という人が、民衆に十二支を浸透させるべく、抽象的な数詞を覚えやすくなじみやすい動物に替えて文献に書いたことから始まります。もともと十二支は、十二年で天を一周する木星の軌道上の位置

(天の位置)を示すための任意の数詞でした。

つまり十二支は

「年」を数える数詞だった



のです。やがては右図のように「月」や「時」を数える数詞などにも用いられていきます。また殷代では、「日(太陽の巡り)」を数えるための数詞には十干(じっかん)がありました。1ヶ月を上旬、中旬、下旬と十日ずつに分けた、その十日を単位にしたものが十干です。

十干(じっかん)

甲(コウ)、乙(オツ)、丙(ヘイ)、丁(テイ)、戊(ボ)、己(キ)、庚(コウ)、辛(シン)、壬(ジン)、癸(キ)

この十干と十二支を組み合わせると「子(鼠)」「丑(牛)」「寅(虎)」「卯(兎)」「辰(龍)」「巳(蛇)」「午(馬)」「未(羊)」「申(猿)」「酉(鶏)」「戌(犬)」「亥(猪)」となります。

これは60個の中の36番目になります。

これは60個の中の36番目になります。



昔々の大昔のある年の暮れのこと、神様が動物たちにお触れを出

したそう。「元日の朝、新年の挨拶に出かけて来い。一番早く来た

者から十二番目の者までは、順にそれぞれ一年の間、動物の大將

にしてやろう」と。動物たちは、おらが一番とて、めいめいが気張って

元日が来るのを待っておった。ところが猫は神様のところにいつ行くの

か忘れてしまったので、ねずみに訊くと、ねずみはわざと一日遅れの日を

と。教えてやった。猫はねずみが言うのを間に受けて、喜んで帰っていった

さて元日になると、牛は「おらは歩くのが遅いので、一足早く出かける

べ」と、夜のうちから支度をし、まだ暗いのに出発した。

牛小屋の天井でこれを見ていたねずみは、ぽんと牛の背中に飛び乗っ

た。そんなこととは知らず、牛が神様の御殿に近付いてみると、まだ誰も

来ていない。我こそ一番と喜んで待つうちに門が開いた。とたんに牛

の背中からねずみが飛び降り、ちよろちよろっと走って一番になってしま

った。それで牛は二番、それから虎、兎、龍、蛇、馬、羊、猿、

鶏、犬、猪の順で着いた。猫は一日遅れで行ったものだから

番外で仲間に入れなかった。それでねずみを恨んで、今でも、ねずみを

追い回すのだそう。

こうして猫は十二支の仲間に入れなかったが、やはり十二支の仲間に入

れなかったイタチは、神様の所へ毎日行って「神様、おらんところへ

はそのお触れというのが来ませんでした。それでは不公平です。もう一回

やり直して下さい」これには神様も困ってしまった。「イタチどん、一つ

相談だが、一年に12日だけ、お前さんの日にしてやるがどうじゃ。月の

最初の日をお前さんの日にしてやろう」「神様、1年にたったの12日だ

けじゃつまらんが、でも我慢します。それをイタチの日にして下さい」そ

う言われて神様は困ってしまった。そうしてやりたいが、またそれが

騒動の元になる。「どうだ、イタチの上に”つ”を付けて、つ・いたちで

それがお前さんの日だ。だがこれは内緒だぞ」イタチは「つ・いたち

つ・いたち」と何回か繰り返していたが「神様、”つ”が

が、でも無いよりはいいから我慢します」それが月の初めの

この日がイタチの日なんだと。

この十二支の話が職人達の間を広まって、時間や日を

を洗って出直して来い」と怒られて、以来猫が顔を洗うようになった。猫がお釈迦様の薬を取りに行ったねずみを食べてしまったために十二支に入れてもらえなかった。などというものもあるそうです。

